

慈しみの
古都・奈良

春日大社 学びの会 2024

春日大社と東大寺 —1300年の国の鎮め—

日時 2024年(令和6年) 9月28日(土) 13:00開演

会場 よみうり大手町ホール(東京都千代田区大手町)

主催 春日大社、読売新聞社

協賛 岩谷産業株式会社、住友電気工業株式会社、ダイキン工業株式会社、西日本電信電話株式会社、関西電力株式会社、株式会社神戸製鋼所、サントリーホールディングス株式会社、株式会社大丸松坂屋百貨店、阪急電鉄株式会社、日立造船株式会社、株式会社松屋、株式会社三菱UFJ銀行、小山株式会社、奈良豊澤酒造株式会社、株式会社明新社

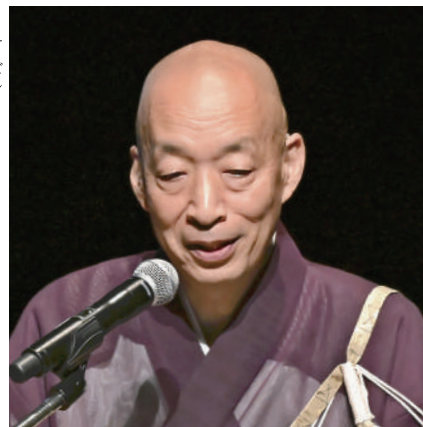
基調講演

2

善行重ね功德の廻り願う 神仏に捧げる鎮めの祈り

橋村 公英 師

華厳宗管長・第二二四世東大寺別当



日本には552年、百済から仏教が公式に伝わり、聖徳太子の時代に畿内を中心に広まりました。仏教公伝は538年という説も有力ですが、大仏様の開眼会が仏教公伝から200年を期して行われていることから、552年説をとっております。太子は仏教とゆかりの深い方ですが、神様も深く崇敬されていました。十七条憲法にある「和をもつて貴しとなす」という言葉は、政治だけでなく神仏の関係にも影響したと思います。

全国に国分寺や国分尼寺を建てて仏教を広め、根付かせようとした聖武天皇は、天平15年(743年)の正月、

「像法の中興は実に今日に在り」(今こそ像法という時代を盛り立てる時だ)とおっしゃいました。仏教では、お釈迦様の入滅を起点に正法、像法、末法と、時代を三つに分けます。正法は、「教(仏法)」「行(修業)」「証(覚者)」の三つがそろっている時代。像法は、教えも行もあるものの、仏様になる人が生まれない時代です。そのため塔を建ててお舍利を納め、近くで修行して縁を結び、仏像を造るのです。平安時代に末法を意識したお寺や極楽浄土に似せた庭園が造られたように、聖武天皇は像法の時代にふさわしいことを、強い意志で進められたということです。天平15年10月15日に出された「盧舎那仏(大仏)造顕発願の詔」では、天地が安寧であり、大仏様をお造りするという善行が未来まで功德として繰り返され、大仏様の尽きるものがない慈悲によつて生きとし生けるものが栄えるようにと願っております。まさに1300年の鎮めの祈りにふさわしい詔です。

大仏様の造顕に際しては、宇佐八幡神は積極的な神助を託宣され、後には大仏様を彩る金も日本で採れるとお告げをされます。奈良・吉野の金峯山で祈願されていた後の東大寺初代別当・良弁僧正のもとには金峯大明神が蔵王権現の姿で現れ、近江にある観音様ゆかりの山へ行くよう告げ、そこでは比良明神が、ここがまさ

プロフィール

昭和31年、奈良県生まれ。昭和37年に5歳で東大寺塔頭正観院に入寺、13歳で得度。大阪市立大学文学部史学科東洋史卒業、龍谷大学大学院修士課程(東洋史)修了後、昭和57年より、東大寺上院・大仏殿などで勤務。華厳宗財務部長・東大寺財務執事、華厳宗宗務長・東大寺執事長等を経て、令和4年から華厳宗管長・第二二四世東大寺別当を務める。

に観音様が恵みをくださる場所だと言われます。このように様々に神様の助けがあつて、大仏様は金色に輝いて開眼供養を迎えることができました。春日大明神は仏法擁護の神として深く関わってくださいています。

二度の罹災を経て、そのたびに復興されてきた大仏様のお姿を見上げており、聖武天皇の祈りが、今も生きていくように思えてなりません。

東大寺において1300年の鎮めの祈りは、聖武天皇が大仏様を造られたことで始まりました。そこに日本の神々と仏が、あたかも家の柱と梁のように尊い和を保ち合える関係であり続けたからこそ、鎮めの祈りは永遠の慈悲として、今日まで受け継がれてきたのではないかと思います。

日本において最も中心となる神様のお言葉が「三社託宣」です。伊勢神宮の天照皇大神宮、石清水八幡宮の八幡大菩薩、春日大社の春日大明神のお言葉を記したもので、始まりは諸説あり、平安時代に嵯峨天皇、弘法大師、吉田神道の創設者・吉田兼俱の祖先の夢にそれぞれの神様が現れて託宣されたとか、また鎌倉時代、東大寺の子院の池から現れたとも言われています。天皇陛下を中心に宮中で信仰されるようになり、室町時代から江戸時代にかけて吉田神道の発展とともに庶民の間へ広まり、三社託宣を書いた掛け軸が床の間に飾られるなどしてきました。春日大社には、

室町時代の僧で興福寺別当も務められた経覚の書かれた三社託宣がございます。

どのようなお言葉かというと、天照皇大神宮は、嘘をつかず、ごまかさず、正直に生きなさいという「正直」を、八幡大菩薩は、隠し立てのない清らかな心で生きよという「清浄」を、春日大明神は、どんな時でも本質を見極め、その上で他人に対し深い思いやりを持って接しなさいという「慈悲」を説いております。そして、そのように生きていれば必ず神様のご加護があり、幸せに導きますよということを言うていただいているのです。

日本人の美徳とされる正直、勤勉、清浄、真面目、優しさは、すべて三社託宣の中に入っています。三社託宣の掛け軸を飾り、潔斎し、正装して、お言葉を声に出して唱え、しっかりとその教えを実行する。今はあまり見られなくなりましたが、戦前までは日本の津々浦々で、そのようなことが何百年もの間、おそらく何百万回と、人々の間で行われてきました。平和で安定した治安の良い社会、勤勉を美徳とする日本人の特長は、先人たちが神様を信じ、ご加護に感謝し、その教えに従って作り上げてきた文化なのです。

今、この日本人の素晴らしい文化が低下しつつあるように皆さんも感じておられると思います。先人たちが何百

プロフィール

昭和37年、佐賀県生まれ。國學院大学卒業後、県立奈良高校教諭等を務め、平成20年4月に春日大社宮司に就任。花山院家は、藤原道長の孫で関白師実の次男、左大臣家忠を祖とし、太政大臣にも就く家で、花山院宮司は第33代当主にあたる。春日大社宮司としては明治以降で11代目。現在、公益社団法人南都楽所会長、奈良の鹿愛護会名誉会長、帝塚山大学特別客員教授なども務める。

著書『春日大社のすべて』中央公論新社
『神道 千年のいのり 春日大社の心』春秋社

年と積み上げてきた道徳心、神様と共に作られてきた社会が少しずつ取り崩され、様々な場面に不安定さが表れています。これは、人間がすべてを支配できると思うようになり、神様、仏様の前で謙虚さを失ったからです。神様のご加護、仏様のご加護といった人知を超えた力なくして人間は幸せに過ごせないのだという謙虚さを、今こそ私たちは思い出す必要があります。

神様、仏様の前で謙虚になり、神棚、仏壇に向かって拝む。そういうことを積み重ね、日本の文化、日本人の美徳は守られてきました。皆様もぜひ、神仏に対して深い敬愛を持って、神棚、仏壇を毎日拜んでいただきますようご祈念申し上げます。



春日大社・中門 撮影：桑原 英文

東大寺・大仏殿 撮影：三好 和義

基調講演

1

春日大社 宮司

花山院 弘匡

三社託宣により育まれた 日本文化と日本人の美徳



人知を超えた力によって導かれていく人生

花山院 春日大社にも同じような話があります。春日大社の境内には、平安時代から奉納されてきた灯籠が約3000基あります。火をともした後に出る煤は、奈良の墨屋さんが集めて来て墨にされます。その墨を刷って、当然字を書くんですけども、春日の神様に捧げた煤から作った墨は病気に効くといつて、戦前までは墨をなめる習慣があったそうです。体のしんどさ



神仏の力に託す様々な習慣
橋村 宮司が三社託宣についてお話しされましたが、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて、東大寺の資料にも似たような物語がいくつもあります。印象に残っているのは、尊勝院の弁曉さんという方のお話です。天然痘が流行していた頃、尊勝院の池に十一面観音の化身だという女の子が蓮の葉を持って現れます。蓮の葉には経典「尊勝陀羅尼」の梵字が書かれており、それを版木に写して紙に刷り、お水取りの行法で祈願して疫病にかかった人に与えれば、たちまち治るとおっしゃいます。弁曉さんがそうようにしたお札を人々に分け与えたところ、靈驗あらたかであったということです。修二会では今も、漢方薬の牛黄を混ぜた墨を使って陀羅尼札を刷っています。信者さんの中には、葉が効いて病気が早く治るようにと、お札の文字をちぎってなめられたり、三社託宣のように床の間に掛けて杯の水面に梵字を映し、それでお薬を飲んだりする習慣があったそうです。

自然の中で生かされている人間
花山院 お話を聞きながら、では神様はどうなのだろうかと考えていました。基本的に日本

花山院 東大寺さんにおいて仏への祈りとは、人々のどういうことのための祈りなのでしょう。か。
橋村 先ほど「功德」という言葉を使いましたが、何か良いことを実践すると「功德」という力が生まれます。それが循環していくというところ、良いことが起こる。現代風に言うポイントカードと同じように、功德というのはいろいろなところで力を及ぼすので、そのために功德を施すわけです。ただ、それがどこに力を発するかは、私たち人間にはわかりません。例えば、私がどこかで祈りをするだとか、写経をするだとか、または仏像をつくるだとか、何か良いことをするとします。良い行いであれば、善業、良い業を生むんですけれども、その業がどこにその力を発揮するかは、私たちにはわからない世界なんです。それは、神仏のみ照したもうところなり。ですから私たちは、「祈る」という行為をするのです。子どもがいて、その子が病気になったりけがをしたりして助けたいという時、親が功德を実践するのは、功德が傷ついている子どもにいつてほしいと思うからですよ。そういう神仏への祈りというもの、見える形で、聞こえる形で、感じていただける形で、聞ける形で、寺やお宮さんで行う祈りなのかなと思うのです。二つの法要などで祈りにはいろいろな形がありますけれども、人と神仏との関わりの中で原点になるのは、そういう祈りではないかなと思います。

仏への祈り

を神仏の力で和らげようとする習慣が、かつてはあったんですね。
橋村 観音様の陀羅尼を、仏法擁護の春日の神様に捧げた煤から作った墨で刷れば、とても靈驗あらたかだろうなと思います。
花山院 池の話でいうと、お能の「野守」は、飛火野にある「野守の池」の底から地獄の鬼が大きな鏡を持って現れるという話です。東大寺さんでも春日でも、池や水に関わるお話が多くあります。奈良だけではなくおそらく日本で、神仏においてはそういう話が多いのかなと思います。
橋村 今風に言う「池は異世界とつながっている」というような見え方が、古い時代にもあったのかなと思いますね。



の神様は場所に関わります。春日大社を例にとれば、奈良時代の後半にご殿ができるまでは、信仰の対象は都の東側にある御蓋山という神山でした。この山から都に太陽が上がり、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という歌があるように、月も上がってきます。また、この山は奈良の水源地でもあります。太陽の光も水も、生きていく上でとても重要です。神道にはいろいろな考え方がありますが、どれも「一番根本的なのは「人間は自然の中で生かされている」という考えです。人生において命は一番大切ですけども、いつ生まれ、どんな人々と巡り合い、いつまで健康でいられて、いつ亡くなってしまうのかは自分では判断できません。それは人知を超えた世界です。この自然の中で、私たちは食べ物に恵まれ、気候に恵まれ、いろいろな人と会うことのできる人生へと、人知を超えた力によって導かれていく。その尊いご加護によって幸せな人生が過ごせるということです。現下からお話いただいたこと言葉は違いますが、私も、内容としては全く同じではないでしょうか。
橋村 神様も仏様も私たちを守ってくださいませけれども、私たちもいろいろな学びを通して、そのありがたさに気づくことができます。そういうことがあつての私たちであり、また守ってくださる神仏かなということ、今日の会を通して改めて思いました。

「春日大社 学びの会」

対談

春日大社と東大寺

—1300年の国の鎮め—

華嚴宗管長・第三四世東大寺別当
橋村 公英師
 春日大社 宮司
花山院 弘匡



写真提供：読売新聞社